慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(六)『〔二十三問答〕』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	三田國文 No.50 (2009. 12) ,p.32- 53
JaLC DOI	10.14991/002.20091200-0032
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20091200-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介(六)『[二十三問答]』

翻刻・略解題

恋田 知子

じ時期に書写されたものと推察される。 と紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」が号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『〔二十三問答〕』

ど江戸以降の版本が数多く伝存するが、写本については、駒沢と江戸以降の版本が数多く伝存するが、写本については、駒沢は、神宗の思想を平易に説いた仮名法語が数多く出版されるが、これらは主に在俗の信者、とくに子女、童豪のためのれるが、これらは主に在俗の信者、とくに子女、童豪のためのれるが、これらは主に在俗の信者、とくに子女、童豪のためのれるが、これらは主に在俗の信者、とくに子女、童豪のためのれるが、これらは主に在俗の信者、とくに子女、童豪のためのれるが、これらは主に在俗の信者、とくに子女、童豪のためのれるが、これらは主に在俗の信者、とくに子女、童豪のためのれるが、これらは主に在俗の信者、とくに子女、童豪のためのれるが、これらは主にない。

士筆の写しが知られている程度である。 大学図書館蔵の元和四(一六一八)年の湊兵部入道安日明岸居

みの誤りと推察される。書誌については、 管見の限りでは、現存する写本でこの系統にあるものは見いだ 青果文庫蔵)に、ほぼ同内容の仮名法語が確認できる。但し、 延宝二(一六七四)年刊の『二十三問答并盲安杖』(前進座真山 によるとするのに共通するものの、その内容は異なってい 窓仮名法語』と称される作品が夢窓の「御袋けんしん」の求め めに応じて夢窓が記した(37丁裏三行目)とあり、一般に『夢 て記される三首の道歌も含め、特徴的である。そこでは母の求 けて、同じく夢窓の仮名法語が書写されており、夢窓の歌とし どが窺える。本書については、二十三の問答末尾にそのまま続 「道書類」にはその両系統がともに収められており、需要のほ(も) と、以下に別の法語や道歌などを付す系統とに大別できる。 函架番号 近ト―七二―ト /順序と相違するが、問答自体の順序は一致しており、目録の そもそも『二十三問答』は、二十三の問答のみで終わる系統 貴重である。なお、本書冒頭の目録は、諸本における配 以下のとおりである。

· 形態 写本。一冊。仮綴

・寸法(縦三一・五糎。横二三・一糎。

表紙 本文表紙共紙。楮紙。

· 丁数 墨付五十丁。

・本文 半葉五行。漢字平仮名交じり。字高約二三・〇糎。

・内題なし。

奥書 なし。

・印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

つなど、読解の便宜をはかった。翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打

ž

(1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻(1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻(1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻

国師法語」」(「禅文化研究所紀要」一三、一九八四年三月)参照。(2) 早苗憲生氏「禅宗仮名法語集の研究(資料篇)―霊雲院本「大応伽草子 百花繚乱」笠間書院 二〇〇八年)を参照されたい。

録』も、目録の後に二十三問答が記されており、写本の伝本のひと(3) この他、江戸初期写とされる祐徳稲荷神社中川文庫蔵『問答目

つに位置づけられる

附記

げる。

による

【翻刻】

もんたうのもくろく

一たうしんおこすへき事

一一しんのむけやうのこと

よしあしかきりなき事

ーよしあしのみなもとのこと

ほとけむまれしにたまはぬこと こんほんのむまれしなさること

一ほとけは人にかはりたること

一まうねんによること一ほとけむしけらとなりたること

一さんけにつみほろふること

けんさいのくわをみてくわこみらいをしる事

一せいくわんおこすこと

一せんこんうろむろかはりたること

りんしうのこと

ほとけほさつきやうの中にいつれおとりまさる事

— 33 —

ことなし。くらゐのたかきもたからのおもき とつのいききれてのち、したかひともなふ うをのことくに、入日もすくれは、いのちもまた しにことならす、すこしのこる水にある いたるまて、あたなること水のあはまほろ さま、さかりなる花のちる、このはのおつるに さためす、あるはなく、なきはかすそふあり いつるいきをもまたす、おひたるわかきをも らひにけふのいのちをたのます、いるいき をすつるこゝろなり。きのふをすきしな 中のつねなきことはりをしりてみやうり あさしとまつ御こゝろへ候はんするは、世の きふかきのかはりさまく、ありといへとも ととや。こたへていはく、たうしんにあさ とふていはく、たうしんおこすことはいかなるこ したかひてつゝまるなり。おやこふうふもひ こゝろなきをほとけにすること きたうの事 こゝろのおこりをいかゝすへきこと ゑかうのこと なにことをもおもはすいたつらなるはあしき事 さんけにふたつあること しやうとをねかふこと わたくしのことはにあらすみなきやうもんなる事 以上廿三もんたら 」(2才) 」 (1 ウ) _ (2ウ) こゝろにまかせぬを、いよく、ほとけのみち うせて、しはらくもとまることなし。なかるゝ なし、ちゝのほとけいてきて又うつりかはり らん。こたう、みなもとはこゝろなり、そのみなもとに をあきらむへし。とふ、そのみなもとは何や なし。たゝよきあしきをなすみなもと一 いつれのことをさしてあしきことゝ申や。こ いはく、いつれのことをさしてよきことゝし とをおこなひてほとけにはなるなり。とふて こゝろをもちてほとけとはなるやらん。こたへ とふていはく、一しんのむけやうによりて、ほと をしんするをたうしんおこすと申候 にいるたよりなるとおもひとりてみの にはしろきほねとなる。うき世のよろつ かをはせのありて、世におこるといへとも、夕 もやうにたつことなく、あしにはくれなひの は身につくるゆへに、身なくなれはその心は にはあらす、かりにその身にやとるなり。され 物をおもひはかる心なり。此心はまことのこゝろ しなく、あれともまつ二なり。一にはしろき たへていはく、よきことあしきこともかきり ていはく、よろつあしきことをなさす、よきこ けにもなり、ちこくにもおつるとは、いかやうに くろきをしり、にしひかしをわきまへ、よろつ 一しんのむけやうのこと (3 オ

此二つの心またへちになく候。たとへは を、よしあしのみなもとをあきらむとは申 申、一しんのほとけとも申、此心のほかにへち 心を妙法蓮華経とも申、一さいのほさつとも によりて、ほとけになるとも申なり。この もあしともおもはす、なにのこゝろもいつれ これをほとけのこゝろと申。されはよしと かはりもせす、たれものこらすもちたるなり。 もなし、いてきもせす、うせもせす、うつり 心はほうかひにあまねくして、ひとりぬし しともあしともおもはぬ一つの心なり。この よ人よのへたてもなく、一ねんをこす、よ はきゑてうつりかはるかことし。二つには我 あふらのちからにてあとよりつゝきまへのほのを もしひほのをもつゝきてみゆれとも、たきゝ ゆきて、あとより又つゝくることく、 水はつゝきてみゆれとも、さきの水はなかれ また月ありて二つみゆるかことくそはの 心は月のことし、ねんをこりてしなくくの よしあしをおもひからす、ねんのなき なし、たゝ大そらのことし、此心になりて することなし、むまるれともむまるゝことも にほうはなく候。此こゝろは身なくなれともう の心もねんもなさぬを心のむけやう ゆひにてめをおすとき、月そらに 」(4才) 」(5才) 」 (4 ウ) こそ、われよ人よ、とてもあるなれ。又しすれはこそ、 入とも申。むまれもせす、しすることなしとは 此世にとゝまらすして、ほとけともちこくとも 物にそむくことなくは、おのつからそはのつ しうちやくの心なく、よろつねんをおこし はからすは、二つあるへからす、せんをなしても、 りなしとおもひ、うちよほかよとあてかひ おさぬは、そはの月なきひとし。こゝろをあ はんの月はかりみよとにはあらす。たゝめを をす人のみなしなり。そはの月をのけて、 月をとてへちに月のあるにはあらす、めを ことにむまれたるにあらす、あるにして なるはひなり、身うこきはたらき、いきのいて みた、大小へんなとし水なり、身のあたゝか むらすしほねなとはつちなり、つはきうみちな とす。かしらのかみ、身のけ、つめかは、しゝ まつむまるゝと申は、ちゝはゝのゑんによりて まれしすることなきをかんやうとするなり。 いかなることそや。こたへていはく、まことにむ むまるゝものはみなしするなり、むまるれは きとてはあるへからす。 とふていはく なく、なきにゝてあり、たゝかりにあるものゝ、 中にしるきのあるを心とす、これはま いりはかせなり、此四つかりによりあひてある つちと水とひとかせと四つのかたらひてすかた (6才) (5 ウ)

すへし。まことに心もあり、まことに身も かまへてく、みなゆめまほろしとふかくしん ち、いなつまなとのことし。かくのことく身の うゑへかりに見へ、ゑんつくれは、もとのことく しするにあらす、たゝちゝはゝのゑんによりて にあらす。されは、しするとみるも、又まことに るにはあらす、むまるゝときもまことのむまるゝ しこゝろもつれてなし。されともまことにしす てしすると見る。此ときかりにその身につれ もせよ、ついにはつちとかへす。これをまよひ みすくみてはたらかす、やきもせようつみ 身ひへてあたたまりなく、かせはなるれは はなかれは、身にうるほひなく、ひはなるれは、 しするとみゆるもかりによりあひたる水 ありとおもひさたむるゆへにちこくに入候 に見へみゝにきゝ、こゝろにうかふ事、あひ しぬることはなく候。たゝいきしにのみならす、 にはなをみいたすことし。まことにむまれ し、そらに花はなけれとも、めのやまひあるゆへ めには、そらにいろくくの花なと見ゆること 身にしたかふ心は、めのやまひある人の まことにむまれたるとみるは、まよひなり。その にうつる月、水のあは、かゝみにうつるかた まことなきをいろく、にたとへられし、 ほのを、ゆめ、かけ、たにのひゝき、 水 め (6ウ) (7オ) (7 ウ) あやつりたるいときれてたをるれは してあやつりたるは、むまれたるかことし。 さたむるによりて、ちこくに入候。たとへは ほとけの御まなこにはかはるとも、此ことは ちこくに入しなり。まよひのしゆしやうなれは ことゝおもひつめて、あらたむることなき心 みるは、しゆしやうのひかことなり、ひかめをま とは申へきや。こたへていはく、むまれしすると しものもしにうする、いかゝむまれしなす いまゝてみゑぬもむまれいて、いまゝてあり る。その御しやりとていまにあり。しゆしやうも みのりをときて、ついに八十にてしにたまへ 九にて御とんせいあり。五十ねんのあいた、 ほとけもまやふにんをはゝとしてむまれ、十 むまれしなすとはうけたまはれとも、しやか つかさるをほとけとは申なり。 とふていはく なし。よろつしうちやくの心なく、二ねんを ぬしなし、心もほうかいのこゝろなれはぬし かせも水もほうかいのきなれは、とりわきて しするとてもさるものなし。つちもひも しにもせす、むまるゝとてもきたるものなく しするとみるかことし。まことにはむまれも にんきやうをいろく、の物をあつめ、つくりいた になるまてなり。まことにしするとおもひ をうたかはす、しんしてかりにみゆるいき

ことましまさすといへとも、此ことはりを うつくしくひかりをはなち、心もしゆしやう みゆるは、ひかことにて候。きしはゝたらかす、 ことくわれらはいきしにのやみのよの中に 見るときには、そのゆめをゆめとおもはす。その さらにこゝろへかたきことにて候。いかゝわきま にかはりましまさすとそうけたまはりし とふていはく、ほとけのかたちは人にすくれ なり。へたてありとおもふは、ちこくにいる心にて候。 すちほともかはらす、こんほんの心おなし物 ことのほとけと申すは、しゆしやうに身のけ くして、かりにあらはれいてたまふなり。ま しゆしやらにおしゑんために、あわれみふか 申はいろなくかたちもなく、むまれしする まことにはさりきたるものなく候。ほとけと とみ、かりなることをもまことなりとみ候 つむゆへに、ちやうなることをもうつりかはる なすなり。われらかまよひのふねにうきし ふねのゆくゆへにきしのうつるやうにみ ふねにのりてゆくとき、きしのうつると よくく、たとへなとにて御こゝろへ候へし。 れしぬるをたゝまことなりとおもひつめも ありていきしにのゆめを見しほとに、むま しにをしうちやくすへからす。たとへはゆめを われらこときものにもおなしものとは 」(9オ) (10 オ) (9 ウ) ににたり。かゝみにかけうつれとも、こん くもれともこんはんの月はくらからす。また ものも、ほとけの心あり。又ほとけの心も なく、ほとけなれはとて、むしけらのこゝろ なりたまひて候や。 こたへていはく、ほとけと ゑにかき木にてつくりたるも、こんほんの なるほとけさゑ、いまはめにみゑたまはす、 ほんかゝみはものをきらはす。されはひらつ ほとけはかゝみのことし。うつるかけはしゆしやう ほとけのことし。くもりはしゆしやうのことし。 われらしゆしやうをはなれす。たとへは月は はなれてもなし。ちこくのほのをにこかるゝ になりたれはとて、ほとけのしやうすること よくこゝろへぬ人は、此ふしんあり。むしけら しゆしやうとこんほんひとつなることをいまた とふていはく、ほとけなにゆへむしけらとは あるをまことのほとけとはおもふへからす。 まてもみなほとけとひとつなり。いろかたち ほんまことのほとけにて、いぬ、からす、むし ほうかいにあまねくわかこゝろ、すなはちこん ほとけはなるゝことなし、もるゝこともなく たゝ木にてつくり、ゑにかくはかりなり。その にてはなをかさりたるかことし。 そのかり くしくひかりをはなしたまふも、ゆめのうち **ゑんや。こたへていはく、ほとけとてかたちうつ** (11 オ) 10 ウ

とふていはく、まふねんによりて、ほとけむし なし。なみなけれは水はもとの水なるかことし。 こゝろやかてほとけなり。くもりなけれは しやうににたり。なみたてとも水はもとの あらす。たゝもとの人なり。ひにいり水に ゆめにむしになれとも、見る人もむしに りもなし。よろつの一たいとしるへきなり。 なつけたるなり。されははしめもなくおは ねんなくてそのまゝほうかいなれは、ほとけと うかいにまふねんおこりてしゆしやうとなる、 になりたるにてはなし。たゝよしなきほ ほとけのこゝろにまふねんいてきて、しゆしやう こんほんほとけとてへちにましくて、其 ほとけともしゆしやうともいふへきなもなし。 ましきことにて候也。 こたへていはく、こんほん けらとなりたまふ、いはれ候や。ほとけまふねんある ねんさまくいやしきかたちとなるなり。 ねんなくはしゆしやうほとけなるへきをまふ ねんをおこすはしゆしやうなり。ねんなけれ 水にてかはらす。又心はまことのほとけなり。 ぬれす。又ほとけは水のことし。なみはしゆ れともかゝみやけす、水うつれともかゝみ 水にもしすます、そのことくむしけらと見 いれとも、ゆめなれはまことにひにもやけす **つきあきらかに、むかふものなけれはかゝみのかけも** 人の (12 ウ 12 オ (11 ウ) そへてすきし世のこうにより、此世に又むく たゝゆめまほろしにて、こんほんのほとけ るゆめのことし。しゆしやうことくくほと をまくゐんあれは、あきそのみよくいてくる らへてよくおひたつやうにつちをほり、たね いんゑんなり。たとへは、はるよきたねをこし もかろしめす、ものをほとこし、にうわなりし ほうは、すきにし世物のいのちをころさす、人を 人にもちいられて、よろつともしからすくわ やまひもなく、くらゐもたかくみめかたちもよく のちの世のことを申なり。此世にいのちなかく とはすきし世、けんさいとはいまの世、みらいとは しるはいかやうなることそや。こたへていはく、くわこ いはく、けんさいのくわをみて、くわこみらいを めくることたゑす、かなしまさらんや。とふて いありて、さまくのかたちをうけ、六たうを ほとけをはなれたるしゆしやうあるへからす。 うこめくむしまてもいやしきこともなし はなれて、すと物みたるにはあらさるかことし。 人のゆめにいろく、の物になれとも、その人 しゆしやうとはなれてほとけましまさす。 しゆしやうとなりたまひたるにあらす。されは いてゝいろくへのいやしきかたちをうくること、 けなれとも、一ねんのまふしうによりてまよひ 一たいなり。まふさうあるによりてこういんと

もなし、たゝゆめのことしとおもひて、たの りきにていまかやうなれはとて、なからへは におもふまゝなる人ならは、さきの世のかい よりなりとしりて、なけくへからす。又此世 まかせぬは、なかき世のたのしみをなすへきた みらいのことをおもひて、けんさいのこゝろに るゝゆへなり。此世にますしくかなしきは むくひかならすあるへきとしるされは、けんさい とも、みらいのかくこなくは、みらいはあしき みらいはよかるへし。けんさいにていみしき人なり みらいのことをよくかくこする人は、かならす ことく、けんさいにてあさましき人なりとも かしくたねをおろせは、かならすあきよきか て、みやうねんのたねをこしらへてつちをお てをむなしくするかことし。此世にてよろ たとへは、はるもおろそかにたねをうへて、 おもはされは、ちこく、かき、ちくしやうにおつるなり 世のことのみに心をくたきて、のちの世を しうちやくふかく、しんしんもなく、たゝ此 ことし。又この世にてよしなきまふねん有 くわあるかことし。はるはくわこ、あきはけんさいの のひとつにて、くわこもしられ、みらいもしら のみあるは、さきの世のむくひなりとしんし へきことにもあらす、百ねんのよわひをたもつ事 つ心にかなはす、ますしくいやしくやまひ 」 (14 ウ) (14 オ (15 オ) こたへていはく、人のいみしくさかへたるくに するとは、なにことにて候や。こたへていはく もあさかるへし。しやうとをねかい、のちの世 とてたつときせんこんと申なり。とふて しめはやとねかいてなすをむろのせんこん にも此ことはりをしんしめ、ゑんをもむすひ りのかうをたきても、わか心はほうかいすなわち これはわろく候。一ゑたの花をさゝけ、一ひね のせんと申。けちゑんはくちすすきましく候共 たて、ふせをなしてくやうをのふるゝこと、うろの をよみほとけをおかみ、てらをつくり、たうを まれぬれは、たのしみをきはめはやとて、きやう ところいゑおほくもち、しからすはしやうとに まさりのかはりあるとは、いかなることそや。 むろのせんとて、なす人の心によりて、おとり とふていはく、せんこんをなすにうろのせん、 おもふへからす。みらいのこゝろおもふへからす。 くわこの心おもふへからす。けんさいの心 く、みらいをかくこすへし。かやうにしりて、 しみにおこることなく、しうちやくのおもひな ほとけのたねはゑんよりおこるにて候へは、う のたのしみをおもひ候はんをも、わろく候はん いはく、此世の心あてにてなすせんは、りやく ほとけなることをしんして、一さいのしゆしやう 又はのちの世にも人とむ (15 ウ)

をはなれてへちにはしやうとなく候、かやうに とねかうは、此世にしうしんふかくのちの世を むろのせんは、ひろくほうかいにひとしくて ありといへとも、そのちからかきりあり。のちには のいたるところか、やかてしやうとにても、此世かい」(17ウ) あともなく、とゝまるところもなくして候はん人 わか身ぬしなく、こくうにひとしく、なにの みすきかす、ありともなしともをもはす、 もとむへからす。なにのねんもおこさす、よろつ やうとは心のうちにあり。ゆめく、心のほかには はしらぬにはまさりたりといへとも、まことのし かきりもなきかことし。しやうとにむまれ候ん きわまりなし。たとへはこくうのほりも のやのちからほとかりて、つゐにはおつるかことし。 りんゑにかへる事、たとへはそらをいるゆみ なり。そのうちうろのせんをなせは、そのむくひ きことをなしたるも、ゐんくわのかるへからす。 むくふことも、よきことをなしたるも、あし 此世のうちにむくふこともあり。のちの世にて からす。ゑにかき、水にてつくりたるほとけを見、 ろのせんとて、ひとむきにきらひすつへ されはつみをはおそれ、せんこんをはなすへき て、りやくおゝし、身になし、心におもふ 一たひそのむくひなしといふことあるへからす。 一く一けのみのりをきくこと、そのゑんにくちすし 」 16 ウ (17 オ) のぬすひとありといふ事も、まなこ、みゝ、 これこゝろに三つのとかなり。又身のうちに六つ そくとおもふことなるを、あきたりもなく、 まれつきたるふんさいにしたかひて、まん を三つのとかといふなり。そらことをいひ、いふ はく、さんけにつみほろふるといふに、二つ候 みほろふるとは、いかなることそや。 かんやうにて候。 とふていはく、さんけにつ よしあしとふぬしにならす候はん事 心におさまり候、なに事ももとめす、そます、 たまひたるみのりかすおほしといへとも、 と申候。しやかによらひ五十年のあいたとき まことのこゝろをしるをほとけのさとり しゆしやうのまよひとし、こゝろをのそきて 心をのそき候はて、まことゝおもひつめたるを とも心のほかにへちになく候。まことならさる やはせかいもなし。まんほうたゝ一しんにて候、 ふかく、いかりはらたち、とゑなくおろかなる、 中ことをいふ。これかくちに四つのとかなり。 ましきことをいひ、たはむれ人をあしくいひ、 おとこは女をおもひ、女はおとこをおもひ候、これ あくと申は、ものゝいのちをころし、物をぬすみ、 しり候へは、ねかふへきしやうとなし、いとふへきし 一つにはあけくれ十あくをつくり候、その十 一こゝろすなはちまんほうにて候、ほとけもしやう む (18 ウ

ちこく、かき、ちくしやう、しゆらにおち候。ほかに もの、此六つの十二によりてそひ候へは、十二の もの、みゝにきこゆる物、はなにかゝる物、した さんけをなし候へは、つまはちきするあいた 候へは、ほんなふもやかてほたひとなる、この あくも十二のつみもこんほんなきものにて はす、身も心も大そらのひさしくなり候へは、 ことなく、何こともいとふましきともおも ひさをくみ、身をしつめ、いさゝかとりつく なにのねんもおこさす、しつかなるところに 水のことく、こゝろとゝまるところなく 身のつみとかもぬしなくあとなく、なかるゝ の一つなくなり候へは、まなこ、みゝ、くち、 ともこゝろともふんへつをなさす。たゝこゝろ をさんけと申なり。二つには身ともくち すれは、こゝろに三つのとかなし。これ つくりしつみとかをあらはし、こうくわい に四つとかなし。しんく~ふかくまへに きやうをよみ、ほとけの御なをとなふれは、 かうはなをそなふれは、身に三つのとかなし。 のつみとかをおそれて、身にらひはいをし おにのあり、ちこくにいることなく候。かやう ぬす人ともおにともなり候。此十二によりて にあちわふもの、身にふるゝもの、こゝろにおもふ はな、くち、した、身、こゝろのことにて候。めにみゆる くち 」 19 才) 20 オ 19 ウ たうにいれんととき、わかくわんまんそく くわんさまく にありとはいへとも、みなこゝろ かいさうもくまても、わか身とおなし物に すくうへしとせいくわんをたつへし。たゝ身 けんそく、そのほか一さいしゆしやうあまねく せいくわんおこすとは、いかなることそや。 こたへて て身につみをつくり、まことに心ありて、心に ねんのあるもなきにて候。まことに身あり も、こんほんなく心なしとさとり候はん。 やうにて候。有さうにてねんおこり候事 ていはく、人のこゝろにまかすへからす。よろ けのうちには、いつれをなすへく候や。 こたへ かことしといへり。 とふていはく、二つのさん てつくりおけるとかは、日に露しものきゆる にひやくまんをくこうのつみをのそき ともとかれたり。しやかほとけはしやうとをはたて ふつのせいくわん、あまねくしゆしやうを此 しんせぬはわろく候。もろくくのほとけの ましきことにて候。われをぬしにふして、ほう ひとりのためをおもひて、こゝろせはくある いはく、ほとけとなりて七世のちゝはゝ、六しん つみをつくるとはおもふへからす。 とふていはく、 つ心のなすことにて候へは、むさうむねんかん く をしめさんためにて候。されはほとけのしよ のひとつをしらしめ、こゝろすなはちなるところ

とるうへにても、なをあるへきやうにおこない なしなとゝいふは、けたうあくまにて候。さ おやもなし、子もなし、ほとけもなし、かみも にて候、たゝ身はかりとおもふは、とつかくしんにて候。 ふんしてやはらかなるこゝろあるは、ほとけ のみのりにて候へは、おやにかうくくに、よろつかん 世の中にいひならわせること、すなはちほとけ して、そむく心なく、する心なくあるへし、 のせんなりとも、こゝろひろくほうかいにゑかう もゑかうせはけれは、りやくすくなし。すこし けれは、うくるくもおなし。大せんをなして ひとりとはおもふへからす。ゑかうのこゝろひろ れらくをまいらせ、ともしひをかゝけて、その人 ろく心さすを、ゑからと申。こゝろさす人のため そゝきても、あまねくほうかいしゆしやうにむけ、 そや。 こたへていはく、一もんをよみ一しつくの水を なり。とふていはく、ゑかうをなすとは、いかなること しやう一しんをしるみちにいりたまはんため 大くわんをはたてたまひたりといへとも、たゝしゆ ほめたまふよしをとかれ候なり。そのほか五百の ほとけよのほとけのくわんよりもすくれたりと をたてたまひたり。これを十方もろくへの ふかきしゆしやうをすくふへしといふくわん とよりしりそきすてられたるあくこうの すして、にこりある世にもろく~のほとけのしやう _ 21 ウ 22 ウ 22 オ こゝろたゝほうかいにひとしくして、おにかめに くわにて、なにとしたる、しにをすへきことをしらす 見いれぬやう候はんそや。 こたへていはく、りんしう とふていはく、りんしうのこゝろあるへしや。りん しんもなく、さたまれるかきりをうとく思ふ いるましきものとたのむ心もなく、いさゝかしら そるゝ心もなく、又ふつほうをわけてたれは、ちこくに こともなけれは、いかゝのちの世はあるへきとお みゆれともおとろかす、ほとけみへたまふとも、 よく候ともわれはかりのみ、まことなからさる ねんもなく、よろつ心をおかつやまひせめてつ も、まへに申ことく、へいせひにかわらすなにの 候はぬやうにあつかうへし。りんしうのかくこと申 きかせぬなり。しうしんしうちやくのふかき事 ことなしと候へは、そのきわによしなきことをいひ しんとなくし人は、そのときのゑんにひかる 候はんするも、いらさる事にて、さりなからたら をよくしり候はゝ、しにさまのことは、いかやうにも」(23オ) 候へは、たゝへいせひこゝろにかけて、こゝろのみなもと むくひ、いまあらはるゝことにて候、いかやうのいん のかくこかんやうにて、さりなからさきの世 しうにはあくまさまたけをなすと申へし。まの なし候へは、あふらのたすけ、ひかりをますかことし。 こもるを、よきりんしうと申こゝろへわけたる したかひ、よろこはす。たゝの心もなくしていきの

とも、それにからかはす、あつかはすして、その心 たつとき人ふみてとをれともよろこはす、け すれとも、たうしんある人は心にうちおく事 にて候。人めにはなにをなすことも見ゑす候はん しうちやくふかくして、みのりにものくさかる して、いたつらなる人はかならす此世のことに さやうにいたつらに候みのりをも心にかけす しん く なくてたうしんなくおろかなる人 なるものをさてはよしと申や。 こたへていはく てなく候。 とふていはく、何事もおもはすいたつら ほとけてんまもしゆしやうもおなし心にてへた まのわさにて候、又をよはさるもまのわさふへて をおさむへきにて候。せんにもあくにもすきたるは かんやうにて候。たとへはめに見え、みゝにきこゑ候 おもふにて候ほとによろつ見すきかすして候か 又何事もおもふへしともおもひ候へは、その心か のこともまのわさにて候、何事をもおもはす。 すくうこく心候へは、てんまなふり候。いさゝか なく、たゝなにことも一心よし物にうつりや にて候。あくまのめみ入ぬやうしんもへちにも せす、なにこゝろもなきすなのことく候はゝ、佛 をおとせとも、すないとひもせす、むさほりも からはしき物をちらせとも又きよく、かうはしき物 むまふみてとおれともすなはちたゝす、また 24 オ) 25 オ (24 ウ なきこゝろほとけにて候。 とふていはく、きたうと こゝろおこらすなにのねんも候はすは、そのめうほう 心をましへす、しらすはからす御となへあるへく候 こうかにゆき、物をくひ候はん時もおこたらす。又 此こと御わすれ候はん。たちいに御かくこ候へし。 をきつとゝまりつ、する心なにものそぬしはた ととりつめて、御うたかひ候へし。又ねつおきつ 申事も世のならはしに候へは、いかやうにして神佛 かはす、すこしもとりつきもとめ候へは、そのねんに とりつくこともなくては、いかゝあるへきとうた れんけきやう、やかてほとけにて候、うたかひ有 めうほうれんけきやうととなへ候ともことなる きやうをよみ、なむしやかむにふつととなへ、なむ れそととりつめて、ふしんして御らんし候はゝ、 み、おしくはしく、にくき心はいつくよりをこる ひまなく候はゝ、日にいくたひもさためてかやうに候 候はんことかんやうにて候。此世のことにひかれて しつめて何ともあてかひはからす、ねんなくして ましきともおもはす、はうく、やみく、として、 をもいとはす、ほたひをもねかはす、何事もおもふ つらなるをよしと申候はんなり。されはほんなふ へし、なをもまきる事あらは、かやうにめに物を へたてられて、まことの心うせ候。まことの心はねん へからす。かへすくくよきことに心をとめて、いた

心もなく、たとへはみちのすちをふみゆくに、

うし

あるましく候。しつかなる所にひさをくみ、心を

此ことはりをしりて、かなふましきをおろかにい てしんしたてまつるへきや。 こたへていはく、 れ、きやうの中にはいつれをすくれたりとこゝろへ 中にはいつれをすくれ、ほさつの中にはいつれすく 心のかみをまつるへし。 とふていはく、仏の ちやくなく、心ねんなくは、わか心すなはち神なり、 心をおさめて心大そらのことく、しうしんしう 神もなし、神をまつるはこゝろをまつるなり。 としくましますなり。しゆしやうの心のほかに にあらわれ、物いわすして草木くもかせにひ をはなれ、きくことをはなれてしかもてんち ほとけの心も神の心もかわるへからす。見る事 もる事なきことはり、まへに申候。しゆしやうの心も にかき、神にあかむることほうかいにあまねくして りうかめのなをうつし、山川くさ木のすかたをゑ くのかたちとなり給ふ。されはとりけたもの さいの神一たいにてまします。ほんちはたゝ なし、一つかみよろつの神にてまします、一 から神と仏は水となみのことくにして、へたて なり。心たにまことのありてすくなれは、おのつ のりのみちのことをいのるを、神も御よろこひある 世のむくひは、神もほとけもおさへてやふりたまはす。 のこゝろにかなひ候はんや。 こたへていはく、さきの 一さいの仏ひとつほとけにて、ひとつ仏も一 一つなり。しゆしやうにゑんをむすはんために、さま 27 ウ 26 ウ 27 オ ことし。かやうのことはりをときあらはしたまふ なにて候。しひふかくして世にいてゝしゆしやう ちさう、ふけん、そのほか一さいのほさつみな一しんの 心をたにしりぬれは、わか心のうちにのこるほとけ ところなく、いきしにもなく、たつとくもなくい もなく、こくうのことくにていたらすといふ きにもなく、ちいさくもなく、くわこ、けんさい、 しうなり。こんほんのをやなり。まことの仏のことは、 しゆしやうのこんほんのしなり。こんほんの ゑんふかくましますはしやか仏なり。われら かく世にいてゝみのりをとき、此しやはせかいに あらためてかすく、まします。その中に さいの仏なり。くわこには仏、けんさいにましく を、一さいのきやうとは申なり。その中に三世もろ なり。まことには仏もしゆしやうも、きのふみつるゆめの 仏ほさつなり、まよふ時は、ほとけほさつもしゆしやう おとりまさるとも申かたし。さるときは、しゆしやうも ほさつにてきにしたかひときにしたかふ、いつれ めて、六たらをいたすへきためなり。されは一 のこゝろすなはちほとけなり。ほさつなりとしらし なく、ほさつ、もんしゆ、みろく、やくわう、くわんおん、 やしくもなし、これこんほんのほとけなり。此 あるなり。そのほとけはいろかんたちもなく、大 まへにくわしく申つることく、しゆしやうの心に ほとけみらいにまします。仏なをかくすかたを みらい

28 オ

_ 28 ウ

にの心もなく、なにの身をもうけぬまへは、大そら おこらぬをによらいとうけたまはりて、又めうほうは心ねん おんなのさとりありとおもふへからす。 とふて はしめて仏になりたるにはあらす、もとの仏 かみすちひとつひきゝるひまに仏になりしも さる心なり。されはりうによはほけきやうをまひて おこたるは、ゑいたるゆへなり。ねんなくはもとのゑい こゝろのうかふことみななくならは、さけにゑひたる」(29ウ) まことならさる身心をゆめまほろしとしりて 心とねんとあるを二つの仏とあらはしたまへり。 しゆしやうみなほうかいのたうにて候。そのうちに ましまして、ほけきやうをときたまひたるは、われら さいこゝろも仏なり。一さいのほさつも心なり。一さい とはねんのことにて候、ねんと心はかわりなし。 みちもなき心のなを、めうとつけられ候。ほう そのめうほうと申もこゝろの事にて候。おもひ のことなりとはいかゝ候や。 こたへていはく、な いはく、こゝろのなきをほとけの心とし、ねんの の心にあることをあらはせり、まことにをとこ 人のゑひさめて、もとの心になるかことし。ねんく のきやうも心なり。たうのうちにしやかとたほうと はからす、ことはにもいはれす、こゝろのわきまふへき わうと申なり。此きやうのかんしんはめうほうにて候 ほとけとなるみちは、ほけきやうにて候、されはきやら く〜の仏、世にいてたまふこんほんは、一さいしゆしやう _ 」 (30 オ) (29 オ

> とけ、人はもとの水にて候。かへすく、一しんのほかへち ほんのこゝろは水そ水のことく、まよひのこほ よいのねんはこほりのことく、ねんもなきこん こくうのことくなるこゝろにくみいとをしき 水のうちにありなから、にこりにしまぬににたり。 けかれす、にこりにします、れんけのにこりたる からす、さりもせす、きたりもせすもほんなふにも たつとくもなく、しゆしやうのむねにありてもいやし られ候。その心はほとけのむねのうちに有ても まことの心をしらしめんために、そのなをめうとつけ おこるなり。ありともなしとも思ひはからさる かたちもなく、なきかとすれは、おもひはかるこゝろ うけたる、そのむねのうちにあるかとすれは、 いんやうやわらきあひてさまくへのかたちを のことし。佛こゝろかりにちゝはゝのゑんにより しろしくろしをわきまへる心もおこり候。そのま い . ろ 30 ウ

つりうつすへきことはりなり。又月の水にうつるも) てうつるにてもなし、たゝをのつからたかひにううちにいるにてもなし、かゝみかみる人にきたりむかふとき、かゝみにうつるは、かけかゆきてかゝみのむかふとき、かゝみにうつるは、かけかゆきてかゝみのこつあらす、たゝほうかいもひとつにて、ひとつの心又ほうかいかこゝろのひとつにかへるにて候。いんくわも」(31才)

心はねんのほかならす、こゝろひとつかほうかいにへむしのほうなく候。ねんをこると申候とも、心のほかならす、

ねんく、おこるいとをしみにくみ、いきしに有心、 こくうのことくと申心はこんほんのひのことく、 こんほんの心は、めに見へす、いろかたちなきゆへに、 めにみゆるまゝまことゝ思ひていきしにもなき ゆへに、しる人まれなり。そのことくかりなるいきしにをは まことゝ思ひて、まことのひはみゆることなし。かるか えんつきぬれはきゑうせ候。此かりのひをのみ なくしてはもゆることもなく、たきゝあふらの うちいたしたるひは、かりのひなるかゆへに、ゑん あひて木の中よりもえいたし、石の中より ありてもきゆることなし。さりなからゑんに いしの中にありてもくらからす、水の中に なく、かたちもみへす、物をもやかす、あつくもなく、 物は、ほうかいにあまねくして、心のことくいろも からまたたとへをとりて申候はん、こんほんのひとい ことのまことなると思ふゆへに、くりことな 神も、こゝろもはなれてはなし、めにみ、みゝにきく おのつからたかひにをなしものなり。よろつかく にきたりて、ほうかいにかこゝろにあるにもあらす、 ほうかいになるにもあらす、又ほうかいか心のうち のつからなることく、こゝろかほうかいにゆきて にのほりて月をうつすへしともおもはす、を くたりてうつるへきとおもふ心もなく、水かそら しる人まれなり。いきしになく何のねんもなく へつとおもふへからす。ちこくもしやうともおにも 32 ウ 32 オ 31 ウ 心もそのことくまことの心のゆふにてかりに かりにあらはるゝひは、こんほんのひのゆへにて候へは、 なにかをかくとも、かにしうちやくせす、心にさ こゑをきくとも、きくことにしうちやくせす、は 見るに、心は見る物にしうちやくせす、みゝに とゆたんなく候はゝ、をのつから御さとりある ことうちはらひて何のねんもなきやうに し候はんや。 こたへていはく、こゝろにうかむ つれて心さまくくにおこり候はんをは、いかゝ 候てはかなふましきことにて候へは、そのゑんに うねんをはらひ候とも、見ることきくことなく て候。 とふていはく、なにの心もなきやうにま あとなくほうかいにひとしく心をもつへきに なるものなりとしんしてぬしにならす、 のねんはをこり候とも、たゝまことならす、かり ともなくなるをしらぬなり。あくこうほんなう なくもならす候、めに見へぬ物は、そのまゝあり ほとに、ゑんつき候へはなくなり候へとも、まことは かりにあらはるゝはかりなり。つち水ひかせにて候 ほんのつち水かせは、めに見へす、いろもこゑもなく候、 なるとまへに申いたすと、水風もひのことく、こん ねんもおこり候。しゆしやうの四よりあひて身と ゑんによつてかりにあらはれ候。ひのことく、 候はぬにつきて、申事もなく候。たとひめに物を へく候。たうしんうすきによりてこゝろにかけ 33 オ

りうによにつめられて物もいはすしてしむ やかてほとけとなりしをうたかはしく申候へは、 ほとけにてほうかいなることなり。いちりをきく けとはなるに、しんによのいちりとは、わかこゝろ の○ふしんしてなむきやうくきやうしてこそほと をはりなるなどでやでほどでようしゃ によは八つこなり、ちくしやうなり、女なれは五 このたひむなしくすこしては、かいあるへからす。りう むへし。六たうの中には人とむまるゝことまれなれ せすは、六たうをめくりなかくくるしみにしつ かはすしんすれは、やすくほとけになり、しん にてやすく候。たゝたうしんのふかきあさきと 心もなきことはやすきことにてかたく候。又かたき かにきやうもんに候や。 こたへていはく、なにの けなしなとゝはかりは、ふしんにおほへ候。たし さす、わか身ほとけにて、こゝろのほかにほと けにはなるへき。やすくたゝなにの心もおこ なんきやうくきやうをつみ、かさねてこそほと こゝろことはをそへられ候や。ほとけになるは のをしへのよしにて候や。又わたくしの とふかくしんするかかんやうにて候。 とふて もとよりぬしなきほうかいにて、ほとけなり をこるともそのねんにいろはす心うこかす、我心 しんく〜のあるとなきとのかはりにて候。うた いはく、かやうにさまく、うけたまはり候は、 ほとけ (35 オ) 34 ウ 34 オ こしもまんする心もあるましく候。いくたひも 心さしられ、かくもんはいらぬことなり。なんきやう とかれたり。女人あく人へたてなくして、たゝ一しん をせす、さいかくもなしとかなしみもあるまし まうさうをはらひてまことの心になして、 もとよりもちたるほとけとしらす、ちこく しぬとみる事、まうさうおほきゆへに、身に との心とおもひて、むまれしなさるをもむまれ てしうちやくふかくまことならさるをまこ にて候。ほうもんをおしへんためにほとけは なかに候も、むねんむさうに候は^、やかてほとけ 」(35ウ) はちまん四せんのほうもんをしる人も、いた むけんちこくに入にて候。一しんのまよひ候は の御こゝろのまゝにていつはりなく候、うたかふもの うこかしねんをおこせは、ほとけの心に 申ことく、いさゝかもあてかいとりつく心にて、 く候。又かんやうはこゝろへすましたりともす はなにのためになすへきや、女の身にてかくもん なにの心をもおこさせしかためなり。まことのことく」 かき、ちくしやうにをつるをかなしみたまひて たゝしゆしやうのわれならさるをわれとおもひ みのりをおほくときたまひたるにてはなし つらことにて候。一し一もんたうをしらす、はれたる ほうかいなり。かはりなし。ほけきやうは、ほとけ 心を

まく、ねんありとも、二ねんをつかす、ねん

したるよし、ほけきやうたいはほんに

も、又かくのことくにて候なり。心はこくうのことく おもひをのつからとゝまり候。ねんのおこるといふ く候へともまことにあよはす、ゆめさめぬれは、 かにゐんと申がことし。ゆめのうちにあゆめは、くるし たとへは、人のゆめにみちをゆくことを、やかてしつ すれともはらはれぬを、いかゝせんとうけたまはり候。 て候。なにともなき心のをこらせたまひ候を、はらはんと およそしゆきやうのみちは、一さいねんをきらい みちをたつね申させたまふに、御返事にいはく、 むそうはゝの御かたよりの文に、しゆきやうの きなり。あさことのかんきんのたひに、あひかま まるところなく候はゝ、その心すなはちほとけ なにのねんもをこさす、よろつしうちやくとゝ ともとむる心もなく、かへすく、なにの心もおこす、 なるたつときありかたきみのりやあるらん いめうほうなりとしんして、此ほかにまたいかやう かいたまふへからす。ねてもおきても、わかふるま かなにかきたるにて候。 ゆめ く かろしめうた わけたまふへきとそんし候ゆへにやはらけて をかきてまいらすへし。いかにもみゝちかく心へ 御うたかひ候はゝ、ほんのことくきやうろんのもん いてく、御らんして此心を御さとりあるへく候 にてけんせあんおん、こしやうせんしよたるへ 」 36 ウ 37 オ 37 ウ これもはからふむね候ほとに、かやうに御ゆめのさ うちすてまいらせ候ことも、御うらみあるましく候。 又いてさせたまふ時も、御りやくのためにて候なり。 御しやきやう候はゝありかたき御ことなるへし。 をはせす候、たとへはあさゆふつきそひ候はす共 われらはさけにゑいたりとしり候へは、あやまり つらことにて候かことし。たとへはゑいかさめ候はね共」(38ウ) にゑいたる人のおもひ思ふことはみないた かい候はゝ、いよく~さまよひあるへく候。 らん候へ、まよひの心をもつてとかく御あて 所にしはらく御こころさしをさつけて 法とはをほしめすましく候。ともかくも心ゑぬ ゆめとおほしめしてすてさせたまひて、よろ かさむへきなとおほしめし候はんをみなく はれ候へし。いつるゆめのさむへきゆめはいかにとして すてさせたまひ候はんにしたかひてけふみんは 候はす。ゆめのうちのいたつらことくおほしめして するまても候はす。身のかたへうけたまひ候まても あさゆふねんのをこり候。やむ物とおほせあん はしめてしり候へ。かやうに申ことなをも御ふしん候はん。 にさとり候とき、一ねんもおこらぬ所をこそ ほとけもしゆきやうをすてゝかくれさせたまひし時も つゆめとおほしめし候ところをまことの仏 たとへはさけ

きやうろんのもんにて候。わたくしのことはかとそむくにてかやうに申は、ことくへくたしかなり。

る人のみたりにおもひつけたることにて候。此ゆへ

にて候。おこる物も候はす。ねんといふもたゝまとへ

となる。はらをたてゝは、しゆらたうにをつ。五かいを せつしやうをおかせは、ちこくにおつ。けんとんの きやうかいにしたかふ。しかるに、此心は一さいのさう まよひよりおこり候。わつかにせけんにしうち これにはすきましく候。 つくくく しやうしりん はりはあるましなと御返事をそてに御ひき 御しゆきやらにて、御さとりをひらかせたまひて めさせたまひ候はぬほとに、かゝるわかれかいりへし。 なし。おこりみたるはしめもなし。さりて ともにとるへきかたちもなく、みるへきいろも かいといふ。これすなはち十界なり。此一ねんを きやうしては、ほとけとなる。これを四しやう したひをさとりては、ゑんかくとなる。六たうを てんしやうにひする。これを六ほんかいといふ。 たもては、人けんにむまれ、十かいをしゆしては 心をおこしては、かきとなる。くちにしては、ちくしやう はち、せんあくのあひわかれて、十かいともにをこる おこるところをねんといふ。此ねんよりすな をはなれて、まんほうのこんけんを此心に しらさるゆへに、みたりかはしくせんあくの するとかをなす。これひとへに一しんのめうりと やくする思ひをひるかへせは、又ふつかいにちやく ゑのゆらいをたつぬるに、うさうしうちやくの てつねに御らんして、たとひつきまいらせ候共 あふとわかれのへたてもなく、とをきちかきのか 」 (39 ウ) (40 オ) 39 オ うせぬれは、うゑんの心またむなし。のうしよせ 又かくのことし。六ほんかいもまことになけれは、 うなし。されは、ねんよりおこる所のゑしやう なにこともまことはさらになかりけりよろつ 人のならふ物かな をしへぬに、をかわれとこゝろへて、こひをは させんの心をとい申けるに、三てうとのゝ返事 やすき世をはいとはす おもへともかなはぬことはねかひ入てすつるに みち、此ほんもんにしき候はすなり。 のあたになり候なり。とんしやうほたひの なりぬれは、しやうしあとをつけり。 つして此せつまたく、とゝまらす。かくのことく のしよゑんの心となる。しよゑんのくうかさねて なくうしやくしよゑんのきやうとなる。みる所 ほうと一たいにてみなくうしやくなり。此時み なすところのまんほう、ことく、くなきなり。まん 」(40ウ) ふたつおこる所の一ねんむなしきかゆへに、 大そらに雲のあるかことし。水のうへのあわに なけれは、ねかひもとむところもなく、たとへは ひすつへきところもなく、ししやうかいもまこと とゝまるをはりもなし。ちうけん又ちうし はゆめのかりの世の中。それさせんのしやうと 又むそうの御うた むそうの御うた あるにうはら ほたひいま いと

(41 オ)

いたりて、きらうへきねんもなく、さとるへきほう さとりをひらかんことうたかひなし。此時に ゆめのさむるかことし。はちすのひらくかことし。 ねんにこうつもりて、月のくもを出るかことし。 とも、ゆめにもたいくつの心をおこされは、し うたかひなし。 たとへはきやうにさとりおかす 心さしなかくありて、むねをあきらめんこと しひたうしんあれは、心もやはらき、しゆしやうの は、一さいのふつほさつやとりたまふとみえたり。 もなふしうをたれたまふ。しんくへのかうへに なもとは、しひあるものはほとけもあわれみ、神 たてあるへからす。しかれは、させんしゆきやうのみ るときは、一さいのにくき、いとをしきのあひへ みなもとは、しひをもつてむねといへり。しひあ おもふこゝろいてき候へき。しかれは、せんこんの このことくをもはんにいかてかころさんと いきとしいけるものは、せんせのきやうたいしやう しやうかいは、しひなきゆへにつくるこうなり。 はしめに、せつしやうかいを第一とす。此せつ なきかことし。ゆへいかにとなれは、まつ五かい しやうしてかきとすへし。しひなき人のいゑ しらとしてし、ひをなし、ねんくくに いゑをつくるに、しんを地として心さしをは いふは、ふかくしんくくをおこすへし。たとへは /~のちゝはゝなり。一さいの物をわかおや の 」 (42 ウ) (41 ウ) (42 オ 又あんらくのところともいふなり。此時とかと 六たうなし。此一ねんはわれもとよりくそくす つきぬあいた、これをたねとして、ちこくにおち、 しめなくおはりもなし。おきふし此ねん 此ねんをしつかに見候へは、此一ねんまことに、 あくのみなもとをしつかにわか心をちらさす をたゝかふかことし。やむことなくおこる。せん させんと申は、ことのゑんにしたかひて、おもて 世をすつへかりけり。むそうこくしのほうこ。 まかすれはおもひもたえむ心なりしゐてそ にしくへからす。 ほとけなり。此ほとけあきらめんことさせん たへたらん時はほうとしやうふしやうふめつの さはりなし。させんしゆきやうのことくにようすは 五しやう三しやうの女も、心のほとけなく、十 心はもとよりさいけしゆつけのかはりもなし。 此ねんのみなもとをみあらはし候へは、ちこく して、くわしく見るを、させんと申なり。されは をかへ、よるひる心にをこりさるなものしに いかてかかくのことくのりをあきらめん。むね あく五きやくのさいそくもほんらいのめんもくは おもひしねんも、へちのものにもなきなり。此 しやうもなく、さとれるほとけもなし。これを もなく、あきらむへき心もなし。まよへるしゆ むそうの御うた

(43 ウ)

あいた、一ねんにしたかいてむまれかへくするを らかなる月のくものうちにかくるかことし。さる されは、かゝみにかけあり。月にくもあり。水 のきやうかいことのゑんをねんと申なり かゝみなれ。わかねんなし。あさゆふせけん けれとも、人のおもてをかけとす。たゝ人の心こそ ひかりしはしかくるゝかことし。かゝみにとかな す。くもおほへは月にとかなけれとも、月の もとより水になみなけれとも、かせをゑんと つさぬかゝみのことく、くもなきそらのことく **ゑんをたねとす。わかふつしやうはかけをう** 此一ねんいつくよりおこるそと見候へは、ことの なり。されは、しつかにわかまうねんをとゝめて のくなり。さて六たなるてんのたねとなる まいなすよりは、たゝふたんにをしく候へは、ちこく」(44ウ) そのうちに、人のせん人あるにてうせきふる りんゑのこうとは申なり。くるまのめくるかことし。 ねんのくもにつゝみみへすして、てりあき のさるにほたされて、ほんふのふつしやうをまう きて、もとの水をわすれたることし。此ねん されはしゆしやうと申は、一ねんのなみにおとろ よりのふつしやうのかたちにて、此ねんあり。 おなししやうなり。此ほんふのわれらかもと すなはち、こくうとひとしく、しやうはこくうと る。ほんふのふつしやうなり。されは、此ほんしん (45 オ) (44 オ) せんをしてみよ。わかまうねんをとゝめて のうちにあらはれおさまるなり。かくのことくの まんのしやうきやう、せかい、こくと、みなくわこ、 おさまれは、わか心のうちに三世のしよふつ八 けあらわるゝまことのもろくへのまうねん 月のやとり、われにねんなけれは、心のほと とゝまらす。われもねんとゝまらすして なく、されは水になみなくして、かゝみにかけ くもはなれて月のとかりあり。なみおさま なし。しやしやうなし。むかしなし。いまなし。 とも、われともちいぬれは、しやとなり候。せんあく はあしきこと、

しやうとはすくなるところなれ のところよりしやに入、しやうに入申なり。しやと 此ところいそきくくちしきとたつぬへし。かやう けんしやうとなつく。たゝかゝみをとくかことし。 のほんしんあらはれぬれは、しはし此所に まうねんむなしくなり候なり。もとより はゝのはらにやとりさりしそのやかて しやうはかゝみのことし。月のことし。ちゝ のわさをもしはしおくへし。たゝわかふつ せんをもおもはす、あくをもおもはす、せけん 人ふしきにもなし。しつかにかたときもさ けんさい、みらい、三世ものこるところなし。わか心 れは、水しつかなり。あひせすはかゝみにかけ になみあり。われにきやうかいのねんあり。 (45 ウ)

ちうまんせうみなく、ほとけのしんたひなり。 やふれ、てうるい、むしけら、けたものまても ことく人ことにむゐのほうはくそくせり。これを みなゆめなり。むいのほうといふは、むまれもせ けはむしんくうなり。しやしやうはねんによりて くわにかた時もわするゝ事なかれ。まつほと まほり候もあやまりなり。たゝしやうしうさ ちに人にもとはすして、させんをきひしく くばんじふんへつすることなかれ。あなか 三さいのおさなきものゝことくして、せんあ するともせす共、わすれたり共にもおもはすして ところなかれ。あひするところなくさせんを していのちのあらんほとは、かまへてく、とゝまる たゝいまをさすかことし。此ほうをきくより をもたすして、わか身のまよひをなをすへし。 はみなく しやにいり候。かまへてく さとり すてにほとけをみいたし、みのりをみいたす わか心のあらぬさま、さかしくなるをも いたるまてみなくへくそくせり。されはしん のこゝろなり。されは、むしけら、さうもくに むまれて、六たうをめくれとも、まことにふつしやう のほうなれとも、心はむゐのほうなり。かたちにて ふつしやうとなつくむまれたるかたちは、うゐ **六たうにるてんするなり。一さいうゐのほうは** 、はしめもなく、おはりもなし。月日の (47 ウ (47 オ) (46 ウ) もなし。われもなし。いかなれはといへは、 こゝろにおもはるゝともやかてわすれよ。又かやうに」(48オ) らぬ所にありきさまよふなり。かうは ことくありて、いゑぬしはいてゆく、わかやと よろつの事をしらさるなり。たゝやかたの わか身の心はともになかりけりとしりて あつくなし。かくのことくあるをしりつれは、 ひはあたゝかにして、水はすゝしくして、しやう いてこす。山はもとの山、水はもとの水なり。 まされはもとよりまんほうこのます、うせす わか身に一ねんもなくして、とかくいろこの なし。むかしなし。いまもなし。したしき とくにして我身にぬしなし。ふんへつ ねんなし。ふたんわか身をよその人のこ そらのくものことくくもれともとゝまらす候へは、 申候へとも、此ねんあしくおもふへからす。大 まなこに見へ、みゝにきこへ、はなにいり、くちにいはれ、 ねんにねんをつくへからす。よろつのものゝきて まひつかさるはくすりといふやまひをしりて おこらさるところもよろこはす。此ねんのをこるや つかされは、ほのうゑにゆきのふるかことし。 ある時とやかたをはなれてゆめをみる。 はかりあり。ぬしにいろかたちなけれとも のゑんによりてねんおこれとも、一ねんを さて此させんはこゝろしつかなれは、たとひとき

うちすて ^ きらはす。すてすてす、とられ す。あひせす、にくます。そうしてむまれこ のこゝろをたねとして、よろつの事を あしたに此ほうをきくゆへにしすとも、この りんしうといふ。しかれは、ほとけののたまはく、 かされすとて、此やとをすつるをなつけて 見るにそのさまかはらす、たうせすものにけ ゆかすさとらすして、人のゆめをみるかことし。ゆめを たうらいしぬれは、たゝへひせいの心さしをは たす。あすをたのむことなかれ。いそき人く もろく、のまんさう、みなほとけなり。いそき此 これをなつくるなり。さとる時は、ちこくせ もはす。しらさるところなり。しやか、たるまとも おきす。物にけかされす。さうして物をもお ありけとも、こゝろはゆかす、とゝまらす。ねす のことくしてよろつの事にいろわすうし ふかけれは、ひさしからす。みのりと申は、 ほうにはかなふなりとのたまへり。心さし りんしうの時とて、へちにあるへからす。しせん つれなしといへとも、いつるいき入いきをま ほんふのふつしやうをあらはすへし。人のいのち いはれをしりたまへ、しやしやうのところをみすてゝ くもりなきそらのことく、ゆめにこくうの かい六たうもなし。たゝかけをうつさぬかゝみ、 へたてなけれは、ふつほうせほうふつしやうわれ人 」 (49 ウ) 」 (49 オ) (50 オ

> く、わするゝことなかれ。 といふ共、せんの時はあひかまへて候。心のといふ共、せんの時はあひかまへて候。心のといふり。けふれんみたれすといへとも、心さしあらんといふ共、せんの時はあひかまへて候。心のといふ共、せんの時はあひかまへて候。心のたゝ我おすところなり。まつたくほかになし

ろなき身なり。さる人のいはく、ほとけは

50 ウ